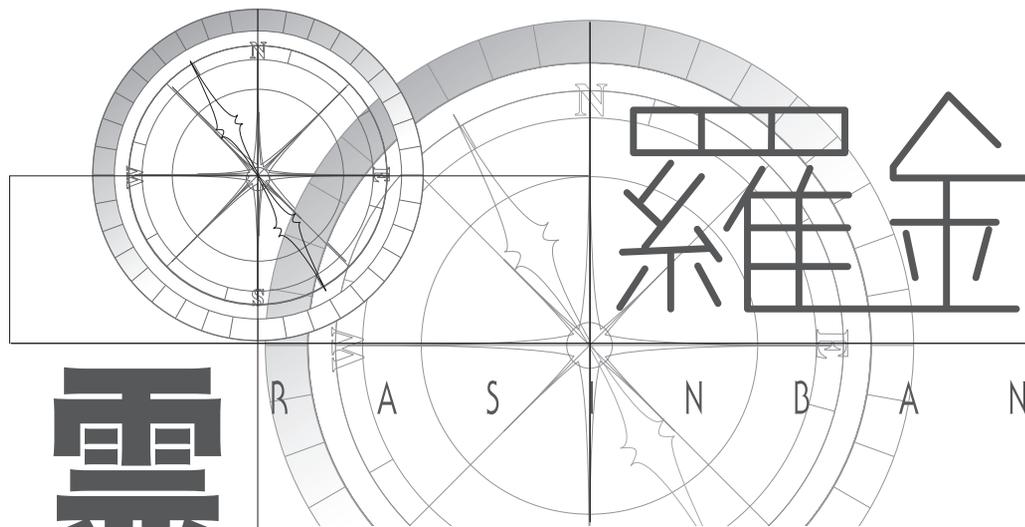


# 金住系 盤舟

COMPASS

http://www.hodoin.net

発行所: 東京都豊島区南池袋  
一丁目十三番十六号  
日蓮正宗法道院法華講  
03 (3984) 2650

## 仏所護念の意味を考えてみると

世の中には数多くの新興宗教があります。それらの新興宗教の中でも、法華経を依経(拠り所の教典)として取り入れている教団が好んで使う経文の言葉として「仏所護念」という経文があります。この経文は法華経の序品や「見宝塔品(けんぼうとうぼん)」にある経文ですが、どうもその意味が正しく理解されていないのが現実のようです。

そこで、まず、その意味を見宝塔品から見てみましょう。「見宝塔品」には、「釈迦牟尼世尊、能(よ)く平等大慧(びょうどうたいいえ)・教菩薩法(きょうぼさつぽう)・仏所護念の妙法華経を以(もつ)て、大衆の為に説きたもう」とあります。これは、多宝如来が、釈尊の説法はすべて真実であると証明した言葉です。

つまり、仏は長い間、菩薩を始めあらゆる人々を平等に救うべき真実の法を護(まも)り念じ続けてきた。その護念してきたところの妙法を今、釈迦牟尼仏は時きたって大衆に説くのであり、それはすべて真実であると証明した場面なのです。ですから「仏所護念」とは、仏の護念したもう所の妙法という意味になります。

ところが、霊友会などの新興宗教では、この仏所を浮かべられない先祖のいる所、つまり墓と捉え、護念とはそれを護るといふ意味と解釈しています。この破天荒な解釈は単なる思いつきにしかすぎませんが、その解釈のいい加減さと大衆に対する詐術には、あきれ返るとともに腹立ちさえ覚えてしまいます。これは、まさに釈尊の説かれた法華経という最も尊い教典の意味を覆い隠す邪悪な行為なのです。では、霊友会では、どうしてこのようなでたらめな経文解釈をするに至ったのでしょうか。その原因を探ってみることにしましょう。

## 霊友会の原点

大正の初め頃、横浜に西田利蔵という人物がいました。彼は足の不自由な子供と口のきけない子供を持つていました。彼が自分のおかれた境遇に苦しみ、悩んだことは想像に難くありません。彼は、近所の無縁墓を洗い清め、それらの無縁墓の戒名を自宅の仏壇にまつり、題目を唱えました。加えて、不軽菩薩(ふきょうぼさつ)の業と称して、すべての人に合掌して歩くようになりました。ここまでくると、不遇な境遇から救われたいが為の行動というよりは、怪しげな新興宗教の教祖の様相を呈してきます。その成り行きとして、彼は仏所護念会(関口嘉一夫妻が作った現在の会とは異なる)という新興宗教を作るようになります。これで法華経の勝手な解釈と思いつきによる新興宗教の誕生ということになります。さて、この教祖の弟子に増子西吉(ゆうきち)という人がおり、この新興宗教の跡を継いでいきます。霊友会の創立メンバーである小谷安吉、その妻キミ、弟の久保角太郎は、この仏所護念会に入会し、久保角太郎は増子西吉から西田の法華経解釈を学ぶことになるのです。しかし、前述したように、西田の法華経解釈は、正しい師匠について学んだものではなく、我流と思いつきにより勝手に解釈したものにすぎず、仏の教えとはほど遠い誤ったものでした。この誤った流れは、霊友会、そして、そこから分派した立正佼成会などの様々な新興宗教に継承されていきますが、そのことについては、別の号で述べることにします。

さて、大正九年、霊媒の要素が強い小谷キミと西田流法華経解釈を受けついで久保角太郎、小谷安吉の三人は、霊の友会として新たな新興宗教を立ち上げ、その後、大日本霊友会と改称した後、昭和五年、小谷喜美を初代会長、久保角太郎を理事長として現

在の霊友会の形を整えました。今は、二代目の久保継成が会長として君臨しています。

これらの事実からわかることは、西田利蔵が、たまたま出会った法華経を勝手な思いつきと我流によって解釈して仏所護念会なる新興宗教を作り、増子西吉がその後を受け、そこに信者として入会した小谷キミ、小谷安吉、久保角太郎の三人が、誤った法華経解釈をそのまま受け継いで霊友会の基礎としたということなのです。そのため、霊友会では法華経の見宝塔品にある仏所護念という経文を正しく解釈できるわけはなく、浮かべられない先祖の霊が障(さわ)り(り)となつて、現在の自分たちの不幸がある。幸せは、まず「い」の一番に先祖供養から始めるべきだという珍妙な解釈による教義ができてきたことになりました。

## 教祖になるという人

人は何かを求めて信仰の道に入りますが、その動機は様々です。ある人は悩みを解決したいと願い、また、ある人は自分自身を高めたいとの願いから信仰者となる場合もあるでしょう。しかし、それは、あくまでひとりの信仰者としてであつて、教祖(教団の創始者)になることを意味するものではありません。ところが、小谷喜美や久保角太郎たちは、どういふ訳か、いとも簡単に霊友会という教団を作ってしまったのです。では、その目的はいったいどこにあったのでしょうか。この問題を解く鍵は、昭和二十四年以降に起こった一連の事件を見るとよくわかります。なぜなら、事件の内容が教団設立の目的を象徴的に物語っているからに他なりません。

まず最初は、金塊隠匿事件が世間を騒がせることになりました。これは信者から教団に入ってくる巨額の金(宗教法人の収入には税金がかからない)を

# 霊友会とは、どのような宗教か

会長である小谷喜美の個人資産とするために計画されたもので、教団の費用を使って金盆、金杯、金の仏具などを大量に購入し、それを溶かして金塊として小谷喜美の個人の資産として隠し持っていたという事件です。この事件は、小谷喜美の言動から横浜の寿署が知るところとなり、昭和二十四年十一月、霊友会は大がかりな家宅捜索を受けることとなります。さらに、翌二十五年、国税庁が脱税の疑いで小谷家の家宅捜索を行ったところ、金庫の中から違法な麻薬が発見されました。小谷喜美はこの麻薬をいつい何に使っていたのでしょうか。捜査では明らかにされませんでした。喜美が自身の霊媒としての能力を高めるために使っていたのではないかと疑いが残る事件でした。また、このときの捜索により、一億五千万円もの収入が申告されておらず、課税額は三千六百万円程度と確認されました。これは、昭和二十五年に起こった事件ですから、現在の貨幣価値に換算すると、天文学的な数字になります。この収入は、当然、信者から集めた金を小谷喜美が個人のものとしていた事実を物語っています。けれども、霊友会のあきれ返る所業はこれだけでは収まりません。昭和二十八年には、「赤い羽根共同募金横領事件」まで起こす始末です。これらの一連の事件を冷静に検討してみれば、小谷喜美たちがどのような目的で霊友会という教団を作ったのかがよくわかります。彼らは教団を設立したことにより、何よりの錬金術を手に入れたと実感したに違いありません。

## 霊友会の造語・インナートリップという欺瞞

インナートリップとは「心のふれあい」「人間の心に帰ろう」という意味であると霊友会では説明しますが、この造語が教団の草創期の理念とはおよそ無関係な標語であることは、賢明な方ならすぐにわかる事実です。ただ、教団のねらいは、カタカナ言葉によって、現代にそぐわない宗名をイメージチェンジしようと思図し

たことは、誰にでもわかる事柄に属するだけいっておきます。

考えてみるに、日本には古来より御霊信仰あるいは、崇（た）りをおそれる怨霊信仰があり、それをベースにした祖霊信仰が深く根付いてきました。霊友会の発足当時の実態は、この祖霊信仰に法華経の仏語を混入させた邪義でした。この教義のイメージを薄めて、いかにも現代風に化粧したのがインナートリップという造語なのです。

また、霊友会は、仏教系でありながら、仏法僧を尊ばない教団でもあります。その実態は、久保角太郎と小谷喜美という霊能族によって、一種独特の在家教団に仕上げられたというのが本場のところでしょう。

本部には釈尊像、伊豆の研修所には弥勒菩薩像をまつり、新入信者はまず総戒名という先祖の位牌を拝むことから教えられ、時いたつて十界の曼荼羅が授けられます。まさに、拝む対象がくるくると変わるわけですから、走馬燈のようにむなし本尊観だといわざるを得ません。仏力、法力は信じず、しかも仏法僧も軽蔑し、自力による死者の供養が第一義となれば、もはや、拝む対象も意味をなさないので当然かもしれません。

この霊友会が南無妙法蓮華経と唱えるのですから、邪宗教とは恐ろしいものです。しかし、霊友会が唱える南無妙法蓮華経は、日蓮大聖人が唱え出された南無妙法蓮華経とは一切関係がありません。なぜなら、前述したように、霊友会では拝む対象がデタラメだからです。日蓮大聖人は、曼荼羅の御本尊を根本とした三大秘法（本門の本尊・戒壇・題目）の修行が大事だと教えられています。また霊友会では、日蓮大聖人を批判して「法華経を信じて題目を唱えることしか民衆に説き得なかつたことは、当時民衆の大部分が文盲であつたという時代背景を考れば仕方のないことであつたとはいへ、やはりそれは日蓮の限界であつたと言ふほかない。」（在家主義仏教のすすめ）と浅はかな愚論を述べています。つける薬がないというのは、こういう輩を指した言葉なのでしょう。日蓮大聖

人は「本尊とは勝れたるを用うべし」と、厳しく霊友会のような本尊の雑乱を破折されています。

## 末法の仏様とは

仏教では末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう時代を指す言葉なのでしょう。末法とは釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味する言葉なのです。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法（白法）がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅して後、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功德もなく、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間では争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。では、末法に入り、釈尊の法が滅した後、どのような仏様が現れるのでしょうか。また、それは、一体、どの教典に説かれているのでしょうか。実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。

釈尊は五十年間にわたり法を説きましたが、最後の八年間に自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったのでした。

さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょうか。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々が持っている尊い命を輝かせる大白法所持され、その法を説くために、いかなる難も忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭い

ながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振舞いは、まさに、法華経に説かれたそのまを身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院（池袋）で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

